Lesson 201　発想する！授業

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

未来の公民館

松田 道雄

提案：現状の公民館を超えて、市民の利用者目線による未来志向で、これからあったらいい公民館のアイデアを考え、自治体に提案していきましょう。

本号は、公民館関係者や社会教育関係皆様に、これからの公民館像として、あったらいいのではないかと筆者（松田）が考えた「未来の公民館」像を10案、提案したいと思います。自分のまちの公民館にぜひあってほしいと思う「未来の公民館」（皆様も新たに考えたアイデアも併せて）がございましたら、自治体の関係者にご提案いかがでしょうか？

なぜなら、学校現場も職場の働き方も、これほど社会がどんどん変化しているにもかかわらず、私たちの身近にある公民館のあり方が、「昭和の公民館」のままだからです。例えば、これほどデジタル化が進み（まだ始まったばかりなのでしょうが）、コロナワクチン接種もスマホから予約をする時代になっているのにもかかわらず、公民館の情報がスマホで見れなかったり（ネット上に情報公開していなかったり）、問い合わせが電話とファックスだけでメールでの問い合わせがないような「昭和」のままの公民館もあります。それらは、「古き良き時代」と懐かしんですむことではありません。

企業は、お客様・消費者・利用者の立場で日々業務改善していますが、公民館が変わらないのは、職員が毎年同じ事業計画を組むことを繰り返して、住民の立場に立って改善しようとしない「お役所仕事」だからと言われてもしかたがないでしょうし、自治体自体が他の事業と比べて、予算的にも地域住民のための公民館を重視していないからと言われてもしかたがないでしょう。

そこで、「昭和の公民館」から「令和の公民館」へと「未来の公民館」に変化していくためのアイデアを、たたき台として以下10の視点から提案します。

1. つながる公民館

毎年度始めに、スマホでオンライン会話アプリの使い方を学ぶ講習会を行い、シニア世代も含めて、地域住民誰もがスマホやパソコンからオンライン会話交流できるようにし、その後の公民館の年間の講座や事業にも、自宅からオンラインで参加もできるようにします。そのために、公民館内のWi-Fi環境を整備し、職員もオンライン活用に対応できるようにデジタルスキルを身につけます。

オンラインを活用する理由は次の点です。地方ではクルマの運転が不可欠ですが、高齢運転者による事故が増加している問題があり、運転免許を返納した高齢者にも地域の公民館として学ぶ支援をする必要があるからです。オンライン会話交流ができれば、自宅に居ながらも地域の人とのつながりも図れます。さらに、いざ災害時での安否確認などにも役立ちます。自宅と公民館がオンラインでつながれば、その後、介護施設に入居しても公民館とつながり続けることもでき、人生の最後まで公民館が地域の人々に寄り添うことができます。

2. 移動公民館

地方生活における「足」の問題は深刻な課題の一つです。公民館にクルマで行くことができなくなった高齢者にとっては、逆に自分のところに公民館が来てくれれば、ありがたいことです。すでに移動図書館の事例はありますので、同じ仕組みで、クルマが公民館になった「移動公民館」を地方で試みることも意義あるでしょう。

その具体的な姿は、クルマの中に住民が入るのではなく、許可を得た地域の空地に「移動公民館」のクルマを止めて、その周りにテーブルと椅子を出し、青空教室のようにして講座や集いを開きます。その学びの催しがあることで、近所の人たちも歩いて集まり、近所づき合い、地域コミュニティづくりの触媒になります。地方の自治体はバスを所有していますので、それを空いている時に「移動公民館」として活用することもできるのではないでしょうか？

3. コンビニ公民館

利用者にとって「便利」（コンビニエンス）なビジネスモデルの代表が、文字通りのコンビニです。コンビニの代表企業に、「朝7時から夜11時まで」を企業名にしている会社があります。それに比べれば、職員の勤務時間内で開館している公民館は、十分に利用者の生活時間に対応しているサービスとは言えません。

健康意識が高まっている今、朝食前の6時ごろに散歩やウオーキングをしている人はたくさんいます。また、日中働いている人にも公民館利用をしてもらいたいとなれば、午後5時以降の勤務時間後に利用できるように配慮することも必要です。職員の勤務形態を工夫しながら、例えば、午前6時から午後9時まで利用できる、「便利（コンビニエンス）な公民館」を、その地域の実情を考慮しながら試行実験してみる価値も大いにあるのではないでしょうか？　住民ファーストであれば。

4. お一人様から公民館

現在の公民館の問題として、サークルなど団体でないと借りることができない利用になっていることもあります。自分の地域の公民館のサークルに関心あるのは、地域住民全体の中でも一部でしょう。人は皆、趣味でも一人一人関心が異なり、十人十色です。鉄道が好きと言っても、乗るのが好きな人（乗り鉄）もいれば、写真を撮るのが好きな人（撮り鉄）もいます。一方で、公民館利用者が固定化しているので、より多くの地域住民に利用してもらいたいという課題はよく聞きます。

そうであれば、一人一人の趣味や関心事も持ち寄って、自分の趣味を他者に披露したり、他者の趣味を学び新たな関心を広げたりできるような、個々人の関心を大切にして、そこから人と人がゆるやかにつながっていくことができるような事業も公民館は行うべきでしょう。例えば、各人の趣味などを見せ合い気軽に交流する集いの「だがしや楽校（がっこう）」を年間事業の中に位置づけている公民館がありますが、その意図と成果はそこにあるようです。「お一人様から」でも気軽に参加することができ、そこから地域の人とつながり・交流をはかれるような

場づくりこそ、「孤独化する社会」の中で存在意義を発揮する公民館になるのではないでしょうか。

5. お泊り公民館

昨今、地球温暖化の影響なのか、毎年のように災害のニュースがあり、そのたびに公民館に避難している様子もニュースに映し出されます。地域住民にとって公民館が災害時の避難拠点になる割合は昭和時代に比べて年々高まっていることは誰にも感じられます。

そうであれば、いざ避難した時に、公民館でより円滑に避難滞在できるよう、夏休みなどに、公民館での宿泊体験事業も防災学習の一環としてあってもいいのでしょう。それを通して、住民がより利用しやすい公民館の改善点に気づくこともできますし、何より、公民館が地域生活により重要な役割を担うことを、住民が再確認することができます。

6. リスキリング公民館

現在の政府も強調しているリスキリング（技術革新や社会の変化に対応した学び直し）は、今後、デジタル化によるさらなる事業変革に伴ってますます必要性が出てきます。社員のリスキリングの方法として、各企業内で勤務時間中に、デジタル技術を社員に学んでもらい、その講師費用などは国が補助するなどのやり方があるかと思いますが、地域の中小企業にとって単独に社員のリスキリングを行うことはなかなか負担があります。そこで、公民館が地域内の中小事業者のリスキリングの場となり、例えば、月2回、金曜日の15時～17時などに、デジタル技術を学ぶ社員向け講習会を、地元の商工会議所や商工会と連携して開けば（講師は国の補助で）、地域の中小事業者間の異業種交流の場にもなりながら、地域経済の底上げに寄与します。

どの地域に住む住民にとっても、エアコンを設置してくれる電気設備業者や、水まわりの配管整備をしてくれる事業者など、実にたくさんの事業者の存在が不可欠です。その事業者にとっても、仕事の効率性、生産性の向上のためにリスキリングは必要です。そもそも公民館は、平日の高齢者の居場所ではなく、住民すべての人の学びの場であることを再確認すれば、新たな産業革命のただ中にいる現代社会で、地域生活を支えてくれている現在の職業人の学び直しの場としても積極的な役割をはたすことは当然のことです。

7. アウトドア公民館

公民館というと、その建物をイメージし、その建物の中の部屋の利用を私たちは思い浮かべます。それはごく当たり前ですが、それぞれの公民館の敷地には、わずかでも庭があったり、駐車場以外の空間があったりするところもあります。そのような屋外の有効利用ももっと考えることもできます。なぜなら、屋外でともに協力して作業する活動は、農作業にしても、地域行事にしても、消防団の活動にしても、学校とは異なる、地域生活の共同的な学び方の原風景だからです。

例えば、アウトドアメーカーや登山愛好会などと連携したテントの張り方教室。庭を活かしたガーデニングや菜園教室。ホームセンターと連携した日曜大工教室など。いろいろアイデアはあるはずです。ユニークなアイデア例として、コンクリートブロックをキャンバスに見立てて、地元の塗装業者から余っているペンキを提供してもらい、ブロック1マスごとに、色を塗装した抽象画を毎年みんなで描くといった壁画教室だって開くことができます（公共施設の壁面に描いたメキシコ壁画運動のように）。

8. アップサイクル公民館

日曜大工には、モノ（素材と道具）が不可欠です。モノの視点から公民館に足りないことを補うアイデアもあります。

アメリカのボストン・チルドレンズミュージアムには、さまざまな日用品などのリユース（リサイクル）グッズが集められて活用できるコーナーがあり、市民が気軽に利用しているそうです。公民館は、部屋を住民の学習の場に貸すことが主ですので、部屋の中は、机と椅子がある殺風景な環境が基本です。そのような部屋では、話し合いや知識を学ぶ学習のスタイルが中心になってしまいます。モノ（素材と道具）を使った学習はなかなか気軽にできません。

一方で、SDGsで啓発されているように、資源（モノ）を大切に利活用することは、昭和の時代に比べてますます重要視されています。最近では、アップサイクルということばも言われています。捨てられる不用品にアイデアを付加して再生することで、「創造的再利用」とも呼ばれています。そこで、館内の一部屋か一角を、モノの利活用コーナーにして、公民館が、地域内の資源の創造的利活用の循環拠点にもなるのはどうでしょうか？

例えば、内装業者は家のクロスを張った際の端材をたくさん持っています。地域にこのようなコーナーがあれば、そこに提供してもらい、新たに活用されることもできます。そのような産業資源・生活資源は、よく探せばたくさんあるはずです。以前、筆者は、ニット工場がたくさんある町の中学校に勤務していた時、ニット工場の残り糸をもらい、学校の空き教室の一角に集めて、編み物クラブをつくったことがあります。モノ（素材や道具）があれば、それを活用するアイデアを考え合って新たな活動（サークル）が生まれる可能性もあります。

9. 研究室公民館

地域には退職されたシニア世代がたくさんいます。その方々の中には、さまざまな研究や開発などをされてきた方もいらっしゃることでしょうし、多彩な分野のキャリアや技術を磨いてきた方々がたくさんいます。しかし、そのような方々が、退職したあと、それまでの能力を地域で活かす場がなく家で過ごされているのは、はたから見るともったいないようにも感じます。一方で、地域はどんどん活気がなくなっている危機感も言われています。日本全体も、人口減少により、若者人口が増加している東南アジアやアフリカなどに比べて、将来の希望が明るいとは言われません。

そのような状況を考えれば、経験知と技術を持つ人材（シニア世代）が地域にたくさんいらっしゃるのですから、地域の公民館の一室を、公募で研究室に貸し出すのもどうでしょうか？

研究テーマは、地域に貢献できる内容で、共同研究の形で募り、採用なった場合、研究室は常時公開し、年1・2回は、中間成果を地域住民に発表するしくみをつくります。大学や企業の研究室のように、研究は設備や実験機材なども必要なので、自宅でできないこともたくさんありますし、研究開発という学びの形の姿を、地域の次世代の子どもたちも身近に見ることができるのは、日本社会の将来の発展にもつながることです。

研究設備や機材は、それぞれの地域研究者が調達することを基本にしながら、徐々に貸し借りできるしくみもできればいいのでしょう。日本全国の公民館の一室で、地域に根差して開かれた多種多様な研究開発が年齢を気にせずに行われれば、日本の高齢社会は何と知的活力に溢

れる社会になるのではないでしょうか？

10. 若返り公民館

公民館が「昭和の公民館」からなかなか変わらない理由の一つに、公民館長の役職が、学校や行政・民間の退職者の再任用のポストになっていることがあるのではないでしょうか（それは、自治体が公民館の位置づけはそのような施設でいいという考えだということもあります）。

公民館に関わる会議は、老人クラブの会議と間違えてしまうくらいに高齢世代で占められます。60歳代以上の公民館長さんが、公民館への若い世代の参加が少ないと嘆かれても説得力は感じられません。若い人たちも活躍できるような場にしたり、新たな試みに挑戦するためには、30代、40代、50代など現役世代の公民館長がいることも必要なのではないでしょうか。しかし、そのためには、長寿社会の大きな問題解決が必要です。

退職年齢が延びることによる問題点として、その分、若い世代の就業機会が減り、組織の新陳代謝が停滞することが指摘されています。その解決策としては、ある程度の年齢になれば、いつまでも組織にしがみつこうとせずに、第2・第3の新たな「仕事」を見つけていくことがあるでしょう。

公務員を退職した後に、コミュニティカフェを開店したり、NPOを立ち上げたり、放棄される田畑を引き受けて地域営農を仲間と始めるなど、前向きに第2の仕事に挑戦する方もいますが、まだまだ少数です。そのためには、組織社会とは異なる、自営・コミュニティづくり・専門職などのスキルを新たに学び直す必要があります（筆者もその当事者世代になりました）。

健康長寿社会、生涯現役社会を実現するには、デジタル技術を学び直すリスキング以上に、「組織に仕える」仕事から、ボランティアも含めて「自分で行う」仕事をつくるリスキングが重要です。それを、組織社会に勤めている間から学べるようなしくみも必要なのではないでしょうか？　それこそ、まず自治体が自治体職員へも奨励する「60歳からの『すること』講座」を公民館で行ってはどうでしょう。

以上、筆者から10の「未来の公民館」像を提案してみました。皆さんは、どんな公民館を思い描きますか？　未来の日本社会のインフラになるような「令和の公民館」づくりを、ぜひ実行されませんか！

（まつだ・みちお　皆さんのまちの「未来の公民館」づくり応援します！）
学院大学教授・宮城県名取市
連絡先
：（m_matsuda@shokei.ac.jp）

社会教育の再設計：シーズン1 新書判
～未来への羅針盤をつくる知の冒険～
『社会基盤としての社会教育再考』
寺脇研・山崎亮・小田切徳美・吉田博彦・牧野篤
発行　日本青年館　2020年12月　新書判　160頁　編著「学びのクリエイターになる！」実行委員会
定価880円（本体800円＋税）送料180円　ISBN978-4-7937-0140-5